
【真の循環】

聖魔光闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【真の循環】

【Nコード】

N6770U

【作者名】

聖魔光闇

【あらすじ】

超常種であるアルモレヌスは、輪廻の楔を破壊して逃走する。物界に転生したアルモレヌスは、流神治となり、超常界からの使者との戦いが始まる。
アルモレヌスの真意は……。

これは、魂を題材にした物語です。

アルモレヌス（前書き）

死んだら魂は、何処へいくのでしょうか？

アルモレヌス

この世に放たれた輪廻という循環は、魂の寄り処を、地でも天でもなく、生物という、いずれ腐敗するナマモノに委ねていた。

魂は、肉体が死滅し、腐敗すると同時に、他の肉体に寄生し、また、新たな進化の過程を築くのであった。

そう。その均衡が崩れさる、あの忌ま忌ましい事件が起こるまでは……。

「どうした！ 何事じゃ！」

「デルス様！ アルモレヌス様が、輪廻の楔を破壊され、自害されました！」

「なんじゃと！ 輪廻の楔が、破壊されたじゃと！ そのような事をすれば、何が起こるかわかっておらんのか！」

「わかりません。しかし、アルモレヌス様は、既に自害され、魂の所在が不明。現在、探索しておりますが、この超常界には、既いないものかと思われます」

「アルモレヌスめ、何を考えておるのじゃ！ 超常界の幻想生命体であるお前が、輪廻を繰り返すだけの物界へと転生するなど……」

「デルス様、如何いたしましょう」

「アルモレヌスの事は、一先ず放っておけ！ まずは、輪廻の楔の修復に取り掛かるのじゃ！」

「は！ 承知致しました！」

『そうせねば、物界の魂共が、行き場を失い徘徊する。徘徊するだけならまだしも、この超常界に、そのような汚れた魂が入り込む事など、あつてはならんのだ！』

色の定まらぬ、不定形な次元の中で、影か蜃気楼ともわからぬ、そのモヤ達は、【輪廻の楔】と呼ばれた白銀の霧の中へ消えていった。

【輪廻の楔】が粉碎されてから、物界の時間で17年の月日が流れた。

「神治！ そんなに、ゆっくりしてたら、遅刻するわよ！」

「へーい」

母親の怒鳴り声にも、全く反省のいろを見せず、神治と呼ばれた少年は、通学バッグを肩に掛けると、「じゃ、行ってくるわ」と、ゆっくり家を出た。

この少年、名を流^{ながれ} 神治^{しんじ}といい、現在^{おんじん}隠刃高校2年生である。

「おい！ 神治！」

後ろから、大きな声がしたと思うと、背中をバシッと叩いた。

「いってええな！ 何すんだよ、春騎！」

「へっへーん！ ボーと歩いてるテメエが、悪いんだよ！」

「んだと！！」

この少年名前を、道程^{みちほど} 春騎^{はるき}といい、神治と同じ隠刃高校の2年生だ。

「神治！ あまり、ゆっくりしてつと、遅刻すんぞ！」

「お前も、同じ事言うんじゃねえよ！」

二人は、そう言いながらも走り出していた。

二人は、同じクラスで、学年でも一二を争う、スピードランナーだった。

そんな二人が、走り出したと思うと、登校中の他の学生達を、たちまち追い抜き、教室に走り込んだ。

「今日の一限目は、と……。体育かよ。げえ！ だりい！」

黒板の横に貼られた時間割を見ながら、春騎は、苦笑いした。

「いいんじゃないね。サボってても、真面目にやってる奴ら以上に出来んだから」

そう言いながら、神治は既に、短パン・Tシャツに着替えている。

「そうなんだけどさあ……。たまには、真面目に運動したいよな」

「お前は兎も角、俺が真面目にやったら、授業にならねえっての」

「さっすが、神治。で、今日の体育、跳び箱みたいだけど、何段に挑戦する？」

「実際なら、27段と言いたいところだな」

「27段つったら、世界記録じゃねえか！ そりゃあ、やべえっしょっ！」

流石の春騎も、27段と聞いて顔色を変えている。

その時だった。辺りの空気が、ザワツと揺れたような感覚がしたのは。

「おい！ 神治！ 何だ？ 今の……」

春騎の顔が恐い。

「はぁ？ 何が？」

「何が？ じゃねえよ！ 今、この辺りの空気が揺れたよな！」

『春騎の野郎、只者じゃねえとは思っていたけど、この感覚がわかるのか！？ しかし正体までは、わかんねえみてえだな。ちよつとごまかして、先に行ってもらうか……』

「そうか？ 俺は、何も感じなかったぜ」

「嘘つけ！ 何も感じない訳ねえじゃねえか！？」

春騎がしつこく食い下がるので、神治は、突然座り込み、話を反らした。

「春騎ゴメン！！ 腹が痛くなってきた。先に行ってくれねえか？」

「やばくねえか？」

「だから、何がやべえんだよ……」

「わかった。そこまで言うんなら、きつと俺の気のせいだな。じゃあ、なるべく早く来いよ！！」

諦めたように、大きく溜息をつくと、春騎は教室を出ていった。暫く間を置いて、春騎が戻って来ない事を確認すると、神治は、教室の扉と窓を全て閉めると、教壇に立った。

「で？ 誰だよ！？ 何の用だ！？」

神治は、誰もいない筈の教室に向かって、一人で話をするかのよ

うに、声を出した。

「流石はアルモレヌス様。気付いておられましたか!？」

声が聞こえた途端、神治の前の空間が歪んだと思うと、形を成さない影のような存在が現れた。

「アルモレヌスだって？ 俺の名前は、流 神治だ！ 間違えんじやねえよ！」

「ほほう。アルモレヌス様も、寄生され、アルモレヌス様であった事の記憶を失われたか……」

影は、感心したかのように、そう言ったが、その場を去ろうとはしない。

「で。そのアルモレヌスって奴が、俺だとして、俺に何の用だよ！」
神治が威嚇すると、影はユラツと場所を移動し、神治の傍まで来た。

「アルモレヌス様の記憶を失われてしまっているのであれば、言っても仕方のない事です、アルモレヌス様が壊した【輪廻の楔】の修復を行っている際、大事なことに気が付きました。それは……、

【楔】の核^{コア}が、無いという事に」

神治の身体に触れる訳でもなく、フワフワと辺りを浮遊しながら、影はゆっくりと話をした。

「で、アルモレヌスって奴の生まれ変わりの俺に、その核とやらを返せと？」

神治は、動じる事なく、影に向かって言葉を発する。

「物分かりが良くて、助かりますね。して、核は、何処にあるのですか？」

フワフワと、神治の周りを浮遊しながら影は、聞いてくる。

「くくく。フハハハハッ！！ バアタレがあ！！ テメエらが、核を取りに来て、核は取れねえんだよ！
【楔】の核はなあ、俺様、神治の核と同化してんだからよ！！」

神治は、突然不気味な笑み浮かべ、高笑いすると、自分の胸を指差した。

「しかも！ テメエら超常界の奴らは、実体がねえから、この物界の生物に触れる事すら出来ねえ！ しかし俺は違う！！ 俺は、テメエらを殺せるんだからよ！」

そして、右手を握り締めると、左手を宛がい、腰の辺りにもっていくと、ゆっくりと鞘から刀を抜くように、青白く光る刃を抜き出した。

「貴様！ やはりアルモレ……」

咄嗟に、神治から離れようとした影だったが、神治に、右手に持った光の刃で影を十文字に斬り裂かれ、スウと空気に溶け込むように消えていった。

それを確認した神治は、刃を鞘に納めるが如く、左手に突き立てていった。

『しかし、後は核だけか……、以外と早かったな。しかも、コイツが俺を見付けたという事は、他の奴がまた来るのは、確実だな。いくら超常界の奴らが、この物界への干渉が出来ないからといって、あのデルスが、黙っている筈がない。コイツあ、ちいっと厄介な事になってきやがったか！？ ……っと、これ以上ボクとしてたら、授業に遅れちまうぜ！』

神治は、教室を飛び出すと、校庭に向かってジャンプした。誰も見ていない事を願って、校庭の片隅に。

『おいおい……。見てたのが、俺で良かったけどよ、あの高さ、ビルの3階分はあるぞ』

たまたま見ていた春騎は、神治の事を呆れて見るしかなかった。

放課後、春騎が神治の傍までやってきた。

「どうだ？ 腹痛治ったか？」

「ああ？ ああ、治った治った」

「んだよお！ 心配してやってんのに、そんなに適当に返事すんなよな！」

「ん？ いや、すまねえ」

上の空の神治に、苛立ちを覚えた春騎は、話題を変える事にした。

「てかよ、朝のあの変な空気は、なんだったんだろうな」

「だ・か・ら、変な空気って、何の事だよ！ 朝も、お前変だったしよ！」

「変なのはテメエだろうが！ あんなに空気が歪んだ？ 感じがしたのによ！！」

「空気が歪むって何だよ！ ま、いいか……。春騎、ゴメン。何か、今日は身体が変だから、帰るわ」

神治はそう言って立ち上がると、右手の拳を高々と挙げて帰っていった。

『春騎……。アイツは、【型物】の常識を超越してやがる……。まさかな。暫く、様子をみるか……。』

ゆっくりと家へ帰りながら、神治は考え続けていた。

ルシベス

(ルシベスよ、目覚めよ！ ルシベス！ 既に気が付いておるじやろうが、物界において、アルモレヌスの存在が明かとなった。ルシベスよ、覚醒し、アルモレヌスより【楔】の核を取り戻すのじゃ！)

『んあ？ 朝か……。変な夢見たな。ルシベスって何だ？ ま、い
いか。夢だしな。気にしねえ』
「よつと!!」

突然、掛け声と共にベッドから飛び起きると、春騎は制服に着替えると、キッチンにてパンを焼き、朝食を摂り、誰もいない家へ、「行ってきます」と声を出し、鍵の確認をしてから、登校していった。

「神治！ 聞いてくれよ！ 今日、変な夢を見たんだ！」

通学途中でであった神治に、挨拶も無しに突然話し掛けた。

「おいおい。春騎、今日も朝から変なのか？」

「何だよ、今日もって！ って、それはいいさ。聞いてくれよ神治。
今日、夢の中に、変なジジイが、出てきたんだよ！」

「あん？ ジジイがどったって？」

呆れ顔で話を聞く神治だったが、春騎は話をやめない。

「でよ、そのジジイが言うんだよ。ルシベスよ、目覚めよ！ って。
なあ、ルシベスって何だと思う？」

「な！ ルシ……。いや、何だろうな。お前の夢なんだから、お前
が一番知ってんじゃないの？」

「それが、全くわかんねえんだよな。なあ、聞してるか？」

『春騎がルシベス。成る程な、だから昨日の奴の事もわかったのか……。でも、コイツ、自分がルシベスの寄生型物だって気付いていねえみたいだな。覚醒する前に、殺っちまうか！？』

「ん？ どったの？ 神治、顔が恐えぜ！」

「うわあああ！！！」

「いってえな！ 何すんだよ！」

顔を突然覗き込まれ、神治は咄嗟的に春騎の頭を殴り付けていた。
「すまねえ！ 悪い、悪いって。突然、目の前に顔出すからだろ！」

「だからって、殴る事あねえだろ！？」

「だから、悪いって言ってんじゃねえかよ！」

神治が走り出すと、春騎もその後を追いついていった。笑顔で。

放課後、いつものように神治と春騎は、帰りもせずに、教室の中で話をしていた。

その時だった。

辺りの空間が歪んだような錯覚に陥った。

「また……だ……。まただ！ 昨日と同じだ！！！」

春騎が叫ぶと、今日は二人の目の前に歪む影のような存在が姿を現した。

「ルシベス様、まだ覚醒なされていないのですか？」

影のような存在は、春騎に近付くと、春騎の周りをユラユラと浮遊しながら、春騎に尋ねる。

「何の事だよ！ ルシベスって何だよ！ それって、夢の話じゃねえのかよ！！！」

現実を直視出来ない春騎は、目を塞いだまま叫んだ。

その様子をただ見ていた神治だったが、静かに立ち上がると、春騎に近寄りポンと肩を叩いた。

「春騎。目覚めたくねえなら、目覚めねえ方がいい。でもよ、お前に寄生したルシベスは、俺の親友だ。だからよ、もし目覚めるんだったら、俺の為に目覚めろよな！」

「神……治……。何を……。言って……」

不安を隠せない表情で、神治の顔を覗き込んだ春騎だったが、刹

那表情が凍り付いた。

「春騎、見てろ！　これが、超常界と物界の融合能力だ！」

そう言って、右手を握り締めると、腰の横に付けた左手より、青白く光る刃を抜き出した。

「貴様は……アルモレヌス！！　まさか、ルシベス様の側にアルモレヌス様がおられるとは！」

「くくっ！！　ギイヤッハッハッハッハア！！　甘かったなあ！」

テメエも物界に輪廻寄生しやがれ！」

悪魔の形相に、不気味な笑みと笑い声を高々とあげる神治は、驚愕する影に向かい斬り掛かった。

「うおっと！　危ないですねえ。アルモレヌス様……、物界の型物に寄生されても、その荒々しい気性は変わらないのですね」

神治の一撃をユラッと避けた影は、春騎の傍へとやってくる、ゆっくりと神治に話し掛けた。

「へっ！　いくら避けたって、テメエからは攻撃出来ねえだろうがよ！」

そう言って、第二激を繰り出した神治だったが、影にその光の刃が当たったと思った刹那、後方に吹き飛ばされていた。

「な！　何をしやがった！」

「昨日、グラミスの魂が消えました。グラミスは、アルモレヌス様を探していた為、アルモレヌス様に排除されたものと考え、デルス様より物界への干渉対策として、捜索隊には、この【型物の魂の欠片】を植え付けられたのです。これにより、我等超常界の精神体も、物界へ干渉出来るようになったという訳です」

実体を持たないような影は、ユラユラと揺れながら、光さえも吸収してしまいそうな、漆黒の欠片を取り出した。

「そうかよ！　結局、テメエらは、物界の型物の事など、何とも思っ
てねえって事か！？」

「当然です。型物など下等で汚い魂と、我々超常界の、崇高で汚れない存在を一緒にしないで頂きたい」

攻撃をガードされた事で、少し動揺した神治だったが、その言葉を聞いた途端、光の刃を再度構えた。

「テメエら超常界の奴らは、結局それだ！ 自分達は、神にでもなったかのように、物界の奴らを汚らわしいモノと分別しやがる。そんなテメエらも、元はと言えば……つと、どうでもいいわなそんな話！ そろそろ、その汚らわしい物界の魂の一部と、なっちまいやがれえ！！」

声と同時に神治は飛び出すと、影に向かって斬り付けた。影はユラツと刃を避けると、存在の一部を空間に露出させたと思うと、鋭利な槍のような物体を神治突き付けた。神治は、後ろのめりに避けると、バックステップした後、刃を構え直した。

「成る程な。言うだけの事は、あるじゃねえか！？ 物界に干渉出来るつてのも、あながち嘘じゃねえみてえだな！ これは、ちとやべえか！？ とか言うと、思ったかあ！！」

神治は影に向かって駆け出すと、影の手前でスライディングに切り替え、影の後方に回り込むと、立ち上がりと同時に斬り上げた。

「ふふふ。無駄ですよ。いくらあなたが、超常界最強のアルモレヌス様であっても、物界にて型物となってしまうたあなたでは、私に敵う筈がありません」

斬り上げを予測していたかの如く、影は斬撃を避けると、空間から突如現れる突きを無数に繰り出した。

神治は、その攻撃を刃で塞ぐ事しか出来ず、後退すると体制を立て直した。

「たかが雑魚ごときが、自惚れてんじゃねえよ！ テメエ、俺が本気でやり合っていると思ってねえか？」

「アルモレヌス様ともあらうお方が、強がりとは情けない。仕方ありません。一撃で、粉碎して差し上げましょう。ついでに、核も返してもらいますよ！」

影は、神治の周囲に隔離空間を作り出すと、中心の神治目掛けて、隔離壁から栗の棘のような槍を突き付けた。

「ふふ。アルモレヌス様も、物界に堕ちてしまえば、ただの愚物ですか……。さて、【楔】の核でも回収して……」

串刺しになった神治に近付こうとした影は、その動きを止めた。

「ま、まさか……。そんな……。そんな、馬鹿なあ!!」

「ううおおおおお!! もう、許さねえ! 許さねえぞお!!」

串刺しになった筈の神治……だったのだが、神治は、青白い鎧に身を包み、気合いと共に、隔離空間を粉碎した。

「雑魚が! 雑魚の分際があ!! このアルモレヌスを怒らせた事を後悔するがいいわああああ!!」

既に神治としての面影など、殆ど無くなったアルモレヌスは、刃を構えると影へと斬り掛かろうとした。

「ぐわあああ!! な、何が! 何が起こったんだあ!!」

その途端、深紅の光に包まれたと思うと、影は一面の空氣に溶けてなくなるかのように、消えて無くなった。

「神治を……。神治を痛め付けんじゃねえよ! アルモレヌス様を痛め付けんじゃねえよ!!」

そこに立っていたのは、深紅に燃えるような、光を放つ斧と盾を携えた春騎の姿があった。

「春騎! 目覚めたのか!」

「神……治……。いえ、アルモレヌス様、長い眠りより目覚め、ルシベス降臨致しました」

春騎は片膝を付くと、神治に深々と頭を下げた。

「やめろよ、春騎」

「しかし! アルモレヌス様!」

神治は、春騎を立たせると、普段の神治に戻り、ニカッと笑ってみせた。

「俺達、友達だろ!」

そう言って神治が差し出した手を、春騎は握りかえすと、「だな」と笑いかえした。

ミルキリシス

ルシベスが覚醒し、アルモレヌスと共闘を始めてから、物界時間にて、一週間が経過していた。

「デルス様。超常界最強と言われたあの二方が、裏切り者と化し、【楔】の核の奪還が苦しくなってきた、等とは考えておりませんか？」

「何を！ 貴様、ミルキリシスか。貴様ごときの腕で、アルモレヌスとルシベスを討てるとは、思わんが……」

「デルス様。既にあれは、アルモレヌスやルシベスではありません。物界の型物に寄生した、世界にとって、最も中途半端な存在です。あのような、半端な愚物など、このミルキリシスが粉碎し、【楔】の核を持ち帰りましょう」

「うぬぬぬ。そこまで言うなら、見せてみよ！ ミルキリシス。吉報を待っておるぞ」

「では」

二つの揺らめく影は、言葉を交わすと、それぞれ辺りに溶け込むように姿を消した。

「やっぱ、あれだねえ」

「○ッポ？」

「違えよ！ 殴られてえのかテメエは！！」

「うわ！ ゴメ！ ゴメンって」

「あれから来ねえな……。と思ってさ」

「アイツら？」

「俺達が強すぎっからかな？」

「流石アルモレヌスだね。言う事が違いわ」

神治と春騎は、普段の生活に戻っていた。

ただ、少し違うのは、春騎がルシベスに覚醒した事により、その

運動能力と頭脳力が、飛躍的に向上した事であった。

「それにしても、酷えよな神治」

「は？ 俺？」

「文武両立なんて、今時めっちゃくちやすげえ奴だと思ってたのに、こんな裏があるんだもんな」

「裏って何だよ！ 裏って！」

「だって、そうじゃねえか！？ 俺も目覚めた途端、この情報量と運動能力。マジで、凹むわ。真剣に、授業やった時が、バカみてえじゃねえか！？」

「そう言うなよ！ 殆どの奴が、それで当たり前なんだからよ！」

神治は、深くため息をつくとき、春騎の肩をポンと叩いた。

「で、納得しろってか！？ 納得出来る訳ねえだろ！！」

「やっぱり？」

「あつたりめえだ！！」

春騎が、肩の手を払い退けながら叫ぶとき、神治はその手を頭の後ろで組んだが、すぐに手を降ろした。

「と、噂をすれば何とやら……、ってヤツか！？」

「みてえだな！ もう隠す事もなく、すげえ気配じゃねえか！」

「ん？ この気配は……。ってまさか、な……」

「いや、そのまさかみてえだぜ！」

辺りの空間がギューンと歪んだと思うとき、辺りとは全く異質な半透明な物質が現れた。

「「ミルキリシス！！」」

神治と春騎は、同時に叫んでいた。

「久しぶりだなあ、アルモレヌス。それに、ルシベス。テメェらがいなくなってから、超常界は、大荒れだ！ デルスは、一層踏ん返り返ってやがるし、周りの奴らも、大半の奴が物界へと寄生しやがった。超常界に物界の魂が紛れ込み、物界の記憶を保った超常種が出現。雑魚の分際で、半不死の身体が気に入ったらしく、デルス部隊に宣戦布告。気が付きや俺も、アルモレヌスの側近だったってだ

けで、反逆者扱いだしよ！ 冗談じゃないぜ、全くよお！ でも、肩身の狭い思いは今日で最後だ！ テメエらの首と【楔】の核を持って帰って、汚名返上してよおおお！！」

敵意剥き出しに、大声を上げるミルキリシスを、神治と春騎は冷めた目で見るとはなかった。

「お前が俺らに？」

「何をするって？」

「テメエらああ！！ ナメてんじゃねえぞおおお！ って、ぶちギレてる場合じゃねえな。テメエらみてえな、半端な奴らをぶつ殺すのに、この俺様が本気になる訳がねえだろおが！」

キレたと思うと、すぐに落ち着いたミルキリシスを見て、二人は互いの顔を見ると笑い転げた。

「喜怒哀楽の激しい奴う！！」

「つーか、早変わりの天才！？」

「「ギャハハハハハハ」」

「テメエらあ！ 瞬殺だ！！ 何も考える暇もないくらいに、瞬間的にぶつ殺してやる！！ 半端種と超常種の違いを、その身に刻んでやる！」

「またキレた」

「キレないとか言ったきながら、キレやがった」

「「ギャハハハハハハ」」

二人の言葉に、理性を失い始めたミルキリシスは、予告もなしに、攻撃に切り替えた。

「うおっと！ 相変わらず、冗談の通じねえ奴だな」

「さっさと、退散願おうかってよ」

バカ笑いをしていたかと思うと、突然二人がマジ顔に変わった途端、蒼白と深紅に輝く光の武具を身に付け、フォームに入っていた。ミルキリシスは、その実体の無い身体を活かし、空間に消えては突如現れ攻撃し、消えては突如現れ攻撃を繰り返した。

その状態に武装はしたものの、手を出すことの出来ない二人は、

互いに場所を離れ、自分の周りの空間が広い場所に立ち止まっていた。

反撃に転じない二人に対し、ミルキリシスは、余裕の笑みを浮かべていたが、二人同時に攻撃出来ないまどろっこしさに、少々苛立ちを覚え始めた。

ミルキリシスの攻撃のキレが鈍り始めたのを察知した春騎は、自分への攻撃を回避した後、防御の姿勢を崩さぬまま、神治の攻撃範囲を攻撃出来るポジションに移動し、神治への攻撃を繰り返すミルキリシスを狙って斬り付けた。

「おおっと!! へ! 流石ルシベスだよな! 昔はよく、俺と一緒にアルモレヌスを護ったからなあ!!」

春騎の斬撃を紙一重で避けたミルキリシスは、ゆっくりと二人から離れた所に姿を現した。

「はあ!? 俺の聞き間違いかねえ! 誰と二人でって? アルモレヌス様を、お護りしていたのは、俺だけだった筈なんだけどなあ……」

春騎は、意地の悪い表情で、ミルキリシスに言葉を投げ掛けた。

「んだとお!! テメエと俺とで、最強の側近だったじゃねえのかよ!!」

「はいいい!? 神治い、訳のわかんねえ事言う奴がいるけど、あんな奴いたかあ!」

「ミルキリシスだろ? 確かあいつは……、雑魚だったっけ?」

「「ギャハハハハハハ」」

春騎と神治の言葉に、完全にキレたミルキリシスは、また姿を消すと、攻撃へと移行した。

「テメエらみたいなの、その重そうな肉を持った奴らに、そんな事言われる筋合いはないわ!!」

空間の至る所から、泣き叫ぶような声が聞こえ、神治と春騎目掛けて、斬撃が繰り返される。

「ミルキリシス。お前の剣の腕じゃ、春騎には、勝てねえよ!」

「神治の剣の腕、忘れたのかよ！」

「俺の剣と春騎の戦斧、この二つのコンビネーションを忘れたとは言わせねえぞ！」

「お前の剣は、所詮神治の剣に比べれば、遊びなんだよ！！」

二人は、ミルキリススの斬撃を避けながら、交互に叫んでいたが、大きく溜息をつくとき、仁王立ちへとフォームチェンジした。

「もう遊びは終わりだ！！」

二人が叫び、肉体に神経を集中した瞬間、光の鎧が燃える炎のように、揺らめく鎧へと変化した。

それと同時に、武器の形態も変化。神治は蒼白に輝く、細身の長刀へ。春騎は、深紅に燃える両刃斧へと姿を変えた。

「見た目が変わっても、その肉は変わらないんだよ！」

そう言って、ミルキリススが空間からの斬撃を繰り出した刹那、神治と春騎の姿が、フツと消えた。

『何い！』

驚いたミルキリススが一瞬姿を現した瞬間、ミルキリススは刀と斧とで、その精神体を三つに分断され、姿を消すことも出来ずに、地面に墜落した。

「な、な、何が、何が起こったんだ！」

怯えた表情で、二人を振り返ったミルキリススだったが、もうその解答を得ることは出来ず、空気に溶け込むように姿を消した。

「ミルキリスス。お前は、肉体に執着し過ぎなんだよ」

「型物は重荷なんかじゃねえ。これが、パワーの象徴なんだからよ」と、言っても、俺もこの前、神治に教えてもらったんだけどな」

二人がバトルフォームを解除すると、輝く武具は、同時に消えて無くなった。

「けどよ神治。ミルキリススのヤツ、何かやべえこと言ってなかったか？」

「超常界の魂が物界に、物界の魂が超常界になってヤツか？」

「そうそう。それ」

「いいんだよ。それで」

「でも、型物に寄生した超常界の奴らが、襲って来るんじゃないや……」

「それは、有り得るな。でも……、今は、堪えなくちゃいけないんだ。これからの為に」

「何だか知らねえけど、理由があるんだな？」

「ま、そういうこった。すまねえな、巻き込んだまっつてよ！」

「気にすんじゃないよ！ 神治らしくねえぞ！」

「そっかあ！？」

ふざけてはいたけれど、二人の目は笑っていなかった。

これから押し寄せる。大きな波乱の波が見えているかのように……。

「つてか、酷えって話終わってねえぞ！」

「えええ！！ また、その話すんのお！？」

サレネ

いつもと同じ放課後。椅子の背もたれを胸側へして座り、話をする二人の姿があった。

「なあ神治？ ちょっと聞いていいか？」

「は？ 何をだよ」

「奴らが探してる、【楔】の核って何だ？」

「ああ、それか。【楔】の核ってのはだな。【輪廻の楔】ってのがあったのよ。まあ、その核ってヤツだな」

「はあ？ それじゃ、何の事だか、全っっ然わかんねえよ！！」

「詳しい説明必要？」

「出来れば」

「面倒臭えなあ……。ちょっと長くなるけど、いっか？」

頬杖を突きながら、話していた二人だったが、神治が欠伸と同時に姿勢を正すと、春騎もそれにならって姿勢を正し、深く頷いた。

「【輪廻の楔】……、これはよ、超常界の魂と物界の魂が、混じり合わねえように創られた、壁みたいなもんだな。その【楔】にも弱点があつてよ、【楔】が【楔】としての機能をする為には、核と呼ばれるエネルギーが必要な訳よ。それが、【楔】の核って訳」

「……って、全っ然長くないんですけど！ って言うか、そんな【楔】なんてあつたか？」

「昔は無かった」

「昔は……って事は、誰かが創ったんだな！ 誰が創ったんだよ！」

「現、超常界超常主。デルス」

「え……。デルス……様？ え、でも、現って事は、旧がいるって事か？」

「勿論いるさ！ 旧超常界超常主の名は、ラズリセル。ま、名前はどうでもいいかあ！？ で、デルスが超常主になってから、まだ超常界の歴史は浅い」

「てかよ、デルス様が【楔】ってのを創ったんなら、デルス様が核も創ればいいんじゃないの？」

「それは出来ねえ」

「どうしてさ!？」

「超常界と物界を隔てる壁の役割を果たす【輪廻の楔】、これの創造は、今の超常界では絶対に不可能だ。なぜなら……」

「なぜなら？」

「なぜなら……」

「おい！ 勿体振るなよ！」

「なぜなら……。【楔】の核は、ラズリセルの魂だからだ」

「え……。嘘……。ラズリセルって、さっき言った旧超常主の……?」

身を乗り出して聞いていた春騎だったが、ラズリセルの魂Ⅱ【楔】の核の事実を知り、困惑した表情になった。

「ああ、その通りさ」

「な、じゃあ、どうしてデルス様は、ラズリセル様の魂まで使って、【楔】なんて創ったのさ！」

「超常界と物界の魂が、混じり合わないようにする為だろうな」

「その話からすると、ラズリセル様が超常主の時は、超常界と物界の魂は、混じり合ってたって事になるんじゃないのかよ！」

「鋭いな春騎」

「茶化すなよ！ それがどうして、混じり合いを拒むようになったんだよ！」

「それはな……。春騎、何を聞いても、ビビるなよ！」

「ああ！ わかってる！」

一度、大きく息を吐くと、神治は話を続けた。

「デルスが来たからだよ！」

「デルス様が……。来た？ 何処から？」

「ここさ！」

「ここ……。ここって、物界かあ!？」

驚愕の事実を知って困惑気味の春騎だったが、途中で話を放棄する事も出来ず、神治は話を続けた。

「デルスはよ。元々、物界種だ。物界にてナモノから解放されたデルスの魂は、超常界にやってきた。超常界では肉体を持たねえから、生物が腐敗する前の記憶を併せ持つて寄生する。そして、超常界に寄生したデルスが起こした行動は、ラズリセルの殺害・魂の確保だった。デルスは、ラズリセルから魂を引き抜くと、ラズリセルの魂が、超常界や物界で寄生をする前に、【楔】を創造し、その核として使いやがった。そして、超常界と物界は完全に隔たれた空間となったんだ」

「どうしてデルス様は、【楔】なんて創ったんだよ！」

「デルスの過去は、軍人らしい。戦争で死んで、超常界へ寄生した。だから、勢いでラズリセルをぶっ殺したけど、自分と同じ物界の奴が、自分と同じ行動を起こしたら……。ってビビったんじゃないか？」

「そして、【楔】は世界を隔てた……」

「そう。そして、俺がぶっ壊した」

「それ！ どうして、ぶっ壊したんだよ！」

暫く間を置いて、神治は遠くを見るような目をした。そして、また大きく息を吐き出した。

「俺はよ。俺も……と言うべきか？ 元々は物界種なんだよ。とは言っても、デルスのような型物ではなく、犬なんだけどな」

「へ？ 神治って元々犬なの？」

「ああ……、つつても気の遠くなるような、遙か昔の話だけだよ」

「ちよつと待てよ！ でも神治の過去が物界なのと、【楔】の破壊がどう繋がるんだよ！」

「それはよ……。俺が物界から転生して超常界に寄生した時、俺は言葉すらもはっきり知らなかった。そんな俺をさ、とても可愛がってくれた奴がいてよお」

「それがラズリセル様ってか」

「春騎……流石だな。そうだ。旧超常界超常主ラズリセル。その身辺警護兵として、一役買われてた」

「でも、ラズリセル様は、デルス様によって殺された」

「元来、幻想生命体である超常種は、簡単には殺せない。魂の寄生こそするものの、実体を持たねえからだ。しかし、幻想生命体が幻想生命体を襲う場合は違う。同質の構成体だから、簡単に触れられし、殺せるんだ」

「って事は、あれか？ デルスへの復讐って事か？」

「それは春騎の考えが甘え。復讐なんてしたって、何の得もねえからよお。でもよ、俺は、昔みてえに物界と超常種との隔たりが無い世界に戻してえのよ」

「それが、神治の真の目的……か……」

春騎はそこまで聞くと、椅子の背もたれに身体を預け、天井を仰ぎ見た。

「でもよ！ じゃあ、その核ってのは何処にあんだよ！！」

少しの間、じっと何かを考えていた春騎だったが、ガバツと身体を起こすと、神治の方へ身を乗り出した。

神治は、暫く目を閉じたままじっとしていたが、ゆっくりと目を開くと、自分の左胸を指差した。

「ラズリセルの魂は、今、俺の魂と同化している」

「マジ？」

「嘘言ってどうすんだよ！？」

「そっか……。わかった。すまねえな、変な事聞いてよ」

「いや、いい。聞かれて当然だからな」

二人は、話に疲れたか、机に伏せるようにして、倒れ込んだ。暫くそのままでいたが、それも長くは続かなかった。

「ねえ……。流君？ 道程君？ ちょっといいかな……。今の話、気になったんだけど、ちょっと教えてくれない？」

「へ？ って、輪中さん！ どったの？」

いきなりの訪問者に、春騎は飛び上がるようにして立ち上がると、

女子生徒の方へ向き直った。

彼女の名前は、輪中^{わなか}望^{のぞみ}。神治や春騎のクラスメートではあるが、特に今まで、話をした事があるような仲ではなかった。

「で？ 何処が気になんだよ？」

神治は、座ったまま望の方へ顔を向けると、頬杖を突いて尋ねた。
「ん」とね。何処が気になる？ って言われても困るんだけどおゝゝ。どう言ったらいいのかな？ 話の中身に興味がある。って感じ？」

「感じ？ じゃねえよ！ 何が気になんだよ！！ て言うか、お前が気になるような話、してねえての！」

望の仕草を見ていた春騎は、突然キレたかと思うと、望を怒鳴り付けた。

「うん。そうだと思うんだけど……。何かね、ラズリセルウとか、デルスウとか、って響きが気になるんだよね」

「は？ 何でそんなのが気になんの？」

春騎は、もうお手上げとばかりに、神治の方を向き、困った顔をした。

神治は、春騎から目を離し、望を見ると静かに口を開いた。

「旧超常界超常主ラズリセル。現超常界超常主デルス。こんな信憑性もねえ話の何が気になるって？」

「そう。超常界……超常主。ちよつと……待って、ね……。もう一回、聞かせてくれる？」

「はあ！？ ま、いいけどよ。旧超常界超常主ラズリセルと、現超常界超常主デルスが何だって？」

「……………」

「黙んなよ！」

神治の言葉を聞いて、神妙な顔つきになったと思うと、無言になった望に春騎は、怒鳴り付けた。

しかし、神治を見ると、神治も神妙な面持ちで望を見つめていた。
「おいおい神治、どうしたんだよ」

「……………」

「お前もだんまりかよ！」

「ちょっと黙ってる春騎！ こいつあ、ちょっとしたビッグゲストの登場だぜ！」

「はあ！？ 何の事だ？」

望を静かに見守る神治に、困惑の表情を隠せない春騎であったが、とりあえず望の方に顔を向けた。

望は、何かを考えるようにして、じっとしていたが、時折何かを思い出しているのか、「うっ！」とか「ハッ！」とか声を漏らしていた。

「神治？ 何が起こってんの？」

痺れを切らした春騎は、神治へ尋ねたが「黙ってる」と、話を切られ、渋々椅子に座り直した。

その時だった。「うううああああああ！！」と、望が叫びのようなうめき声をあげた瞬間、望を黄金の光が包み込み、その姿を再度現した時には、黄金の白衣と拳を身に付けた望が立っていた。

「よう！ サレネ。お前も、物界に寄生してやがったのかよ！」

静かに言葉を発した神治は、立ち上がって望に近付いた。

「アルモレヌス様……。サレネ、覚醒いたしました」

望は、片膝をつくと神治に深々と頭を下げる。

「神治……。コイツは……」

「ルシベス！ 頭が高いぞ！ 貴様如きの分際で、アルモレヌス様を呼び捨てにするとは、言語道断！」

望は即座に立ち上がると、春騎に対し、ファイティングポーズをとった。

「まあ、落ち着け。サレネ」

「しかし！」

なだめようとする神治に、闘志を剥き出しにして望が食いつく。

「ここは物界。しかも、俺達はただのクラスメート。違うか？」

「しかし、それは記憶を封印していたからであって……」

「俺達はもう、超常種じゃあねえ。だからよ、ややこしい上下関係は無しにしょーや」

「は！ わかりました」

「だからよ。敬語も無しだ。じゃねえと、おかしいだろ！？ 今日まで、なあなあで話してた輪中がよ、明日になったら、俺に敬語で話してたら」

「そうですね。いえ、そうよね」

「わかってくれたら、それでいい。これからもよろしく頼むぜ！

春騎！ 望！」

「おう！ 任せとけ！」

「うん。よろしくね」

神治の差し出した右手に、それぞれの右手を重ねる春騎と望であった。

「なあ神治？ いつから、輪中がサレネだって気付いたんだよ！？」

「あの二回目の超常主の説明の途中かな？」

「マジで？」

「だから、嘘ついてどうするよ！？」

「いや、これは口癖で……」

「そこお！！ ルシベス！ アルモレヌス様に対して、頭が高いわ！！」

「ハハハ。先が思いやられるぜ……」

「ひいひい！！ 許して。許して！ サレネ様あ！！」

キュルネピン

（まさか、あのサレネまでもが物界へ寄生しておったとは……。しかし、何故じゃ。何故、アルモレヌスにばかり強者が集うのじゃ。このままでは、核を取り戻す前に、過去の過ちを繰り返してしまう……。仕方がない。ここは、奴らに動いて貰う事としようか……。待っておれよ、アルモレヌス！！）

「ちよつと！ 流君！ 余裕なのはわかるけど、もうちよつと真面目に授業受けなさいよ！！」

「あゝ！ うっせえ！！ 何なんだよ、お前はよ！ うっせえつーの！」

「ハハハハ！ 神治が……。尻に敷かれてる！ ハハハハハハ！！」
「笑うんじゃねえよ！ 春騎！」

授業の合間の休憩時間。珍しく、神治と春騎・望が話をする風景があった。

クラスメート達は、望が神治達という事に対して、陰口ととれる話をコソコソと言っていたが、当の本人達は、特に気にも留めていないようだった。

「うわああああ！！」

「キヤアアアア！！」

突然、廊下が騒がしくなったが、神治達は何も変わる事なく、話を続けていた。

「アルモレヌスは、一体何処におる！！」

「ルシベスは、一体何処におる！！」

「サレネは、一体何処におる！！」

教師の制止と学生の混乱の叫び声の中、太い大声が響き渡っていた。

「神治！！」

「流君！」

三人は、即座に立ち上がると、廊下に飛び出した。

「アルモレヌスは、一体何処におる！！」

大声を張り上げる、小さなオッサン？　が、人混みの中を歩いてくる。

「何だあ？　あのオッサン！？」

「えっ！　でも、あの身長……百三十センチ位しかないよ……」

「お前ら！　見た目で判断すんじゃないよ！　デルスの野郎、とうとうコイツら出してきたか！？」

ふざけて指差す二人を差し置き、妙に真剣な表情で、ファイティングポーズに入っている神治を見て、春騎と望も、戦闘体制に入った。

「お、アルモレヌス。久しぶりじゃのう」

「久しぶりじゃねえよ！　それより何だ！　その格好は！！」

「仕方ないやろお。物界において、ワシのパワーを引き出そうと思おたら、この肉が一番良かったんや」

「ふざけやがって！　春騎！　望！　氣い抜くなよ！　ナメてつとぶつ殺されっぞ！！」

「なあ神治……。あのオッサン、知ってんのか！？」

「あんなオッサン知らねえ！！」

「じゃあ、どうして気をつけるなんて言うのよ！」

「あのオッサンは知らねえが、あのオッサンの中身なら、よく知ってるぜ！！」

「だから、誰なんだよ！　あのオッサン！！」

「コイツは、キュルネピンだ！」

「「キュルネピン？」」

「キュルネピンを知らねえのか！？　まあいい！　コイツに勝ったら、教えてやるよ！！」

神治が言葉を放った瞬間、キュルネピンは姿を消した。

「来るぞ！　構えろ！！」

神治の合図より先に、春騎は腹部に激痛を覚えていた。

神速の如く動き、手にした棒にて、神治達を攻撃していたのだ。

「くそお！ 見えねえじゃねえか！ あのオッサン！！」

キュルネピンの攻撃は、激しさを増し、姿を捕らえる事が出来ない上に、腹部・胸部・腕部・脚部へのランダムな、打撃が続いた。

「く！！ 流君！ 道程君！ このおじさんのウツ！ 相手、私に任せてクウツ！ 貰えないかしら！？」

「何！！ 望！ 大、丈夫……なのか！？」

一応、確認しつつ、神治と春騎は後方に下がると、バトルフォームを解除した。

それを見たキュルネピンは、望の前に姿を現した。

「お、お嬢ちゃん。一人でやるんかいな？」

「ナメないでよ！ これでも、元ラズリセル様側近兵が一人、サレネですからね！」

そう言うのと、望は気合いと同時に黄金に光る拳と白衣を身にまとった。

「ほな、ワシは手え抜かへんで！！」

そう言い残すと、キュルネピンは再度姿を消した。

望は、両手を下にダランと垂らしたまま、目を閉じ、じっとしたまま動かない。

そのままの姿勢で、時折繰り出される打撃を、手刀で流しつつ、相手の気配をただ読み続けていた。

攻撃がなかなかヒットしないキュルネピンは、少し焦りを感じたが、本当は少し手抜きしていた神速を、最大限まで上昇させ攻撃を再開した。

スピードの乗った打撃を受け流す事が出来なくなった望は、両腕を顔の横に付け、背中を丸めガードポジションをとったまま、微動だにしなくなった。

動かなくなった望を、サンドバッグのように、腕・脚部を怒涛の打撃で叩き続けた。

『ぬほほほ。お嬢ちゃん、結局手も足も出えへんみたいやのう。こりゃあ、勝ったも同然やわ。ほれ！ ほれ！ ほれ！ いつまで耐えられるかいのう？』

怒涛に続く、まるで嵐のような打撃の中で、望は、微かに感じるキュルネピンの気配を探り続けていた。

そして、キュルネピンの百二十七回目の打撃が、望の足にヒットした際、望はバランスを崩して、膝をついた。

「やっぱり無理じゃねえかよ！！」

春騎が飛び出そうとした瞬間、神治に腕を掴まれ、神治の指差す方向を見ると、望が掌を二人の方へ向け、うっすらと笑っていた。

『ほな、畳み掛けまんでえ！！』

キュルネピンが、膝をつきガードの崩れた望にトドメの一撃を、頭部目掛けて放った瞬間、望が立ち上がると同時に、天井にめり込むようにして、キュルネピンが姿を現した。

「が！ ぐほう！！ お、お嬢ちゃん……、な、何したんや！？」

「お腹のガードが、がら空きだったから、一発おみまいしただけよ。私が撃たれた数に比べたら、大した事ないでしょ？」

暫くして、腹部の肉が背中に突出したような、いびつな形になったキュルネピンが落ちてきたと思うと、望は、床につく前に、また天井へと打ち返した。

「がぼう！！ だ、だ、だずげでぐれ。」

口から大量の血を吐き、天井にめり込んだまま、キュルネピンが叫んでいたが、望はキュルネピンを見上げたまま、右手を白銀に光らせると、自分の足や腕にその光を当てた。

「あ！ ゴツメーン。おじさん、言うの忘れてたけどお、私、ラズリセル様のところにいた時、回復班だったんだあ。だ・か・ら、こんな傷、ほら！ もう治っちゃった！！」

無傷の状態に戻った望が、天井にめり込んだままのキュルネピンに、その姿を可愛らしく披露すると、みるみるキュルネピンの顔は、恐怖に歪んでいた。

「詐欺や！ イカサマや！ こんなないやろ！？ 助けて、な！
助けてえや……。助け……」

再度、天井の板と一緒に剥がれ落ちてきたようなキュルネピンは、望に腹部を強打され、望の腕が背中から突出した。

「ゴメンなさ〜い。おじさん、柔らかいから、突き抜けちゃった。
……じゃ、そろそろ死になさいよ！！」

と言うが否や、望はキュルネピンを右腕から引き抜くと、空中に放り投げ、跡形が無くなるまで、殴り続けた。そして残ったモノは、血まみれの望と、学校の廊下だった。

教師や生徒は、何が起こったのか理解出来ず、半狂乱で早退する者・夢だと思いつく事により、現実逃避する者・目の前の惨劇に気絶する者と様々であったが、不思議と神治達三人に関わろうとする者は、一人もいなかった。

いや、誰も関わりたくなかったのかも知れない。

「なあ、輪中。あんなに強くてよ、あんな技があんだったら、初めから教えてくれよな！ ……ってか、もしかして、神治知ってた？」

「当たり前だ。サレネとの付き合いは、長えんだぞ。俺がラズリセルのトコにいた時から……。いででででで」

「ラズリセル様と言いなさい！ ラズリセル様と！！」

望が神治のこめかみを拳でグリグリとしていると、春騎は突然真剣な表情になり、「で、誰なんだよ！ キュルネピンってのはよ！！」と、神治に顔を近付けた。

「いででで——っていい加減離せ！ 痛えよ！！ わあった！ わあったから離れろ！ 俺にそっちの趣味はねえ！！」

「バ、バカ野郎！ 俺もねえわ、そんなモン！！」

春騎が慌てて離れると、神治は少し難しい顔になった。

その表情を見て、春騎と望は、生唾を飲み込み、神治の言葉を待っていた。

「キュルネピン。あれは、邪閻種だ。この世界には、超常界・物界・

そして、歴史から抹消された世界、邪閻界が存在する。邪閻種ってのは、転生寄生の影響を受けない珍しい種だよ。邪閻界内のみで、寄生が行われる。しかし奴らは、元々超常界や物界を我が物としようと、過去に数々の戦乱を起こした。その為に、旧超常主ラズリセルによって、世界の裏側の世界。超常界も物界も干渉出来ねえ世界に、隔離・幽閉されたんだ。アイツらは、七闘鬼と言って、能力の抜きん出た奴らが七体存在する。その内の一体が、キュルネピンって訳だ。奴らの本体も、元々は超常種と同様、幻想生命体。だから物界の型物に寄生して、襲ってきやがったんだろう」

「どうして、そんな奴らが……。幽閉された奴らが、ここに来るんだよ!!」

「そんなの簡単なことじゃねえか! デルスだよ。デルスが、……きつと、俺達を倒せば、物界をくれてやる。とでも、言いやがったんじゃないの!?!」

「……許せないわね。デルス」

望のその言葉に頷いた二人だったが、春騎は少し浮かれていた。

「でもよ。今回、望一人で勝てたじゃね? って事はよ、後六体もパパッと片付けられんじゃないやねえの!?!」

その言葉に反応し、神治の顔を咄嗟に覗き込んだ望だったが、その表情を見て、すぐに落胆した。

「春騎……。それはねえ。キュルネピンは、七闘鬼の中でも先兵だ。邪閻種の中で抜きん出た存在、七闘鬼。その中で、一番弱えのが、キュルネピンなんだよ! これから先、ヤベエ奴らが来ると思う。気い引き締めてくれよ! じゃねえと、確実にぶっ殺されるからな!!」

神治の話を聞いて、顔面蒼白になった二人は、ただうなだれたまま頷くしかなかった。

ヤービダヌ

(ほう。ルシベスという奴は、ここに住んでおるのか。ではワシは、邪魔の入らぬこの場で、ルシベスを殺らせてもらおうかのお)

「じゃあ、行ってきます」

春騎は、相変わらず誰もいない家へ向かってそう言うのと、鍵の確認をして学校へと向かった。

普段と何も変わらない、登校時間。の、筈だった。しかし、春騎の周りに、他の生徒の姿が見えない。春騎は、一人で登校していた。「ようやく、出てきおったんかいな。もう、待ちくたびれたで……」
登校途中、突然現れた中年太りの、いかにも喧嘩とは無関係そうな男が、春騎へ話し掛けた。

『うわあ！ 変なオヤジ襲来だ！ ヤベッ！ 関わったら、長そうじゃねえかあ……』

なるべく、目を合わせないようにして、春騎は横を通り過ぎようとした。

しかし男は、それを阻止するが如く、春騎の後ろから肩を掴んで離さなくなった。

『このオヤジ、超ヤベエ！ 能力解放して逃げる？ 一般人にそんな事したら、ヤバイっしょっ！！ どうしよう……。あゝ！ マジでオヤジ、ウゼエんですけど!!』

男の掴んだ手を振り解こうと春騎は、無我夢中で暴れた。そして結局、「あゝ！ もう、放せっつーの!! 遅刻すっだろおが!!」と大声を出すと、男を投げ飛ばしていた。

『うげ!! やっちまったあ……。ここは、そのままそろーつと……。そろーつと……』

「って、何処行くんじやい我え!! 人んこと、あんだだけ投げ飛ばしてくれて、なんにも言わんと逃げようというのは、あかんのとちゃう

んやないか!？」

「うわあああ!! 起きやがったあ!! あれだけぶっ飛ばされて、起きやがったあ!!」

逃げようとするも、どうしたら良いかわからない状態に陥り、春騎は、オッサン・進行方向を交互に見ていた。

男は、春騎の側までやってくると、額にかいた汗を、ポケットからハンカチを取り出して拭いている。

「ワシは、邪閨種七闘鬼が一人、ヤービダヌ。ルシベスやろが!! 逃げんと、勝負せいや!」

ポケットにハンカチをなおすと、そう叫んで、仁王立ちになった。

「嘘お! 七闘鬼い!! この前の小さなオッサンの方が、強そうだったじゃん!! よっしゃあ!! 当たりだ! やってやるぜ!!」

仁王立ちのヤービダヌの前に立つと、気合いと同時に深紅の武器を身にまとった。

しかしヤービダヌは、襲ってくる様子もなく、仁王立ちのまま、

春騎に向かって右手を伸ばすと、手首から先を曲げて春騎に『来い』とアピールした。

「何をお!! ナメてんじゃねえぞお!」

春騎は飛び出すと、右手に持った斧でヤービダヌの頭を強打した。
「弱い」

強打した斧のヤービダヌの声が聞こえた瞬間、春騎はヤービダヌを直視した。

確かに春騎の斧は、ヤービダヌの頭を直撃していた。しかし傷どころか、凹むこともせず、頭に斧が春騎の手を支えに乗っているだけだった。

「ええええ!! マジでえ!! 何、コイツ!？」

「斧と盾を振り回す輩だと聞いておったで、えれえ力持ちだと思っ
ておったんじゃが、ワシの勘違いだったようじゃな。……ほんじゃあ、もう死ねやああ!!」

斧が当たっていたヶ所をさすりながら、春騎の方を向くと、形相の変わったヤービダヌは大声で怒鳴り付けた。

叫びと同時に。ヤービダヌは走り出すと、春騎に突進してきた。春騎は堪えようとしたが、皮膚が異常に硬く、触れても掴む場所もなく、建物のコンクリート壁へと叩き付けられた。

「ガハアッ！！」

口から血を吐き出した春騎だったが、身につけた深紅の鎧が身を守り、身体が潰れることはなかった。コンクリートの壁には、大きな衝撃波を受けたようなヒビが入っていた。

「が！　グハッ！　っんっう身体だよ！！　やってくれんじゃねえかあ！！　もう……、手加減しねえからなあ！！　ああ！！」

フラフラと立ち上がると、春騎は気合いを入れ直した。

「ほう。これまでは、本気や無かった……っう訳かいな！？　そりゃ弱いわ。弱くて当然や。オノレ、ふざけとらんと全力でこんかい！！　ワシは、ちっともオモロないでなあ！！」

再びヤービダヌが仁王立ちになると、春騎は「おおおおお！」

と雄叫びをあげながら、斧を振り上げ走り込んでいった。

春騎は、接近と同時にヤービダヌの腹部へと渾身の一撃を放った。

「ど、どうだ。やったか！？」

「やはり弱いもんは、弱いまんまやなあ！　期待して損したで」

「く！　くそお！！」

春騎がもう一撃と構え直した瞬間、ヤービダヌは春騎を捕まえじヤンプした。

空中でヤービダヌから逃げようと、もがいた春騎だったが、それも虚しくヤービダヌに押し潰されるように、地面に叩き付けられた。

「グホア！！　ガッ、ガハアッ！！」

更に血を吐き、のたうちまわる春騎。

そんな春騎へ追い撃ちをかけるように、ヤービダヌは高く飛び上がると、身体を丸め、春騎の腹の上に激突した。

何度もヤービダヌは飛び上がり、春騎の上に落下する。

そんな中、春騎の深紅の鎧に無数のヒビが入り始めた。

『のほほほ。後少しやなあ。後少しで、鎧も粉碎して、あんたの肉をミンチにしてあげまっせえ!』

攻撃の手を緩めないヤービダヌ。血を吐き、もがき苦しむ春騎。鎧のヒビは、もうヒビではなく、亀裂と化していた。

「あれえ……。なかなか、春騎がこねえから見に来てみれば、面白そうな事してんじゃねえか!?　なあ、ヤービダヌ」

声の方向を振り返ると、神治が笑って立っていた。

ヤービダヌは、少し驚いたように後退りした。

「気にすんな。俺は止めねえからよ。好きにやんなって!」

「おい、アルモレヌス!　ルシベスが負けそうなのに、えれえ余裕やないか。ルシベスが死んだら、お前のせいやからな!」

ヤービダヌは少し落ち着いたように、春騎の方へ向き直った。

「おいルシベス!　アルモレヌスからよお、オノレの抹殺許可がおりたでえ。所詮、友達いうても、大したことあらへんなあ」

「おい、ヤービダヌ!　春騎をぶっ壊したいんなら、もっとマジで殺れよ!　じゃねえとお前、死ぬぜ!」

神治が後ろから叫んでいたが、ヤービダヌは既に聞いていなかった。

「神……治……?　マジかよ!?　し、しゃあねえな……。フ、フパワーで、い……。くか!!　ううおおおおお!!」

春騎は立ち上がると、雄叫びと共に気合いを入れ直した。深紅のオーラが燃え上がり春騎を包み込んでいく。そして、春騎が再び姿を現した時、火炎が揺らめくような鎧と盾を身にまとい、春騎の身体よりも大きな戦斧を肩に乗せていた。

「オッサン!　遊びは終わりだあ!!」

春騎は飛び出すと、盾を戦斧に付け両手で戦斧を握り締めると、ヤービダヌに斬り掛かった。

「ほお。来いや!　来いやあ!!　そのチンケな攻撃が終わった時が、オノレの最後じゃあ!!」

ヤービダヌは再び仁王立ちになると、春騎の攻撃を身体で受け止めた。

「所詮は雑魚や!!」

「へ! 言ってる!! まずは……、腕一本貰ったあ!!」

春騎が駆け抜けると、ヤービダヌの左肩から炎が上がり、ヤービダヌの左腕が切り離され飛び去ると同時に、瞬時に焼け炭のようになって地に落ちた。

ヤービダヌの左肩は、焼けたようになり、一滴の血も出ていなかった。

「なかなか、出来るようになりましたなあ。それじゃあ、ワシも本気で殺してもらいまひようか!？」

腕が無くなったにも関わらず、痛みがないのか、うつすら笑みを浮かべたヤービダヌは、全身に力を溜め始めた。

ヤービダヌの皮膚が、みるみるうちに変化する。型物の肌が水気を失いかサカサになると、渴いた地面のようにヒビ割れると、光沢を浴びた鱗のような形状になっていた。

「十闘鬼が一人、絶対防御のヤービダヌ。本気で行かしてもらいまんでえ!!」

ヤービダヌは飛び上がると、春騎目掛けて急速落下した。

春騎が落下地点を予測し、攻撃を回避すると、ヤービダヌは地面に激突した。

ヤービダヌが激突したアスファルトは、粉々に粉碎し、砂のようになって舞い上がる。その瞬間、またヤービダヌは大きく空中へ飛び上がった。

「バ、バケモノめ……」

春騎は第二撃の突撃を見つめると、まるで野球バットを握るようにしてヤービダヌの落下を待った。

急速落下するヤービダヌ。打ち返さんと待ち構える春騎。そして、ヤービダヌが春騎のストライクゾーンへ入った瞬間、「うおおおお!!」と掛け声と共に、春騎は戦斧を振り込んだ。

ヤービダヌと戦斧が交差した瞬間、黄色い閃光が辺りを包み、光が無くなった時、ヤービダヌの皮膚に突き刺さった戦斧が現れた。

「もうちょっとやったんやけどなあああ!!」

ヤービダヌは不気味な笑みと共に、戦斧を掴むと、身体から引き離そうとした。

「オッサン! 俺の武器は、斧だけじゃないんだぜえ!!」

その刹那、盾と同化した戦斧は、極大のハンマーに形を変えたと
思うと、春騎の気合いと共に、地面へと叩き付けられた。

しかし、地面にヒビ一つ入らない。よく見ると、ハンマーで叩き付けられたヤービダヌは、深紅の巨大な盾の上で、粉のようになり、風に拐われていった。

「おい神治! どうして助けてくれなかったんだよ!」

「まあ、いいじゃねえか!? 勝ったんだからよ!」

「神治い!!」

「アハハハハ!!」

「逃げんな!! お前!!」

遅刻確定だったが、二人は仲良く? 学校へ急ぐのだった。

『春騎……。まだ、完全に覚醒してねえのか!? ルシベスの能力

……。まだまだ解放させねえと、春騎……。ヤベェじゃんかよ!!』

バノドス

(いくら超常種戦闘士の寄生物だからといって、女に負けるとは、キュルネピンの奴……、情けない。所詮は、キュルネピンだからか……。しかし、私はそうはいかんぞ！ 待っておれよ！ サレネえええ！！！)

「流君。道程君。じゃあ、また明日。バイバイ」

「おう！ 輪中じゃあな！」

「ヤバイのに襲われたら、連絡しろよ！」

下校時、神治達と別れた望は、家路を急いでいた。

『それにしても、流君は兎も角、道程君……、あのままじゃ、危ないわね。流君、気付いているのかしら……？』

もう少しで、家へ辿り着くという時、望の前に一人の女性が立っていた。

「あなたがサレネ？ 探したわよ。キュルネピンを殺したのは、あなたよね？ ちよっと、私と勝負してくれるかしら？」

「七闘鬼！？」

望は少し下がってバトルフォームへ変化した。

「七闘鬼……ね。私、その呼び方嫌いなよね。まあいいわ。そうよ、邪閨界七闘鬼が一人、剛腕のバノドス。元ラズリセル側近救護兵、爆裂のサレネ、勝負受けてもらおうわよ！」

バノドスは、掛け声と同時に望へと駆け寄ると、望の腹部へと強烈なアッパーを繰り出した。

望はガードポジションにて、受け止めた。

『な、何、この攻撃……。重たい！！』

「何びびってんだい？ まだまだ、これからだよ！！」

バノドスの猛攻が始まると、望はガードとスルーを主体とし、反撃のタイミングをはかった。

が、ガードをする度に、腕が痺れていく。スルーをしても、すぐさま繰り出される拳撃に圧倒されていた。

『か、回復する暇も……ないじゃない』

スピードは速くないにもかかわらず、一撃一撃の威力が尋常でない。

そして、バノドスの繰り出したストレートに対して、カウンターを繰り出した刹那、カウンターは避けられ、頭部に激痛を伴い望は、吹っ飛ばされた。

「な、なかなか……、やる、じゃない……。ちょ、ちょっとだけ……、痛かった……わよ」

ヨロヨロと立ち上がり、ファイティングポーズをとると、望は腕と頭の痛みを少し回復した。

「それだけでいいの？　ちゃんと、回復した方がいいんじゃない？　待っててあげるから、ね」

バノドスは、不敵な笑みを浮かべると、戦闘フォームを解除した。「言ってくれるじゃないの！　後で後悔しても、知らないからね！　」

望は完全回復すると、再びバトルフォームへ移行し、バノドス目掛けて駆け寄り、正拳突きを繰り返した。

望の正拳突きを右手の掌で受け止めたバノドスは、その手を持つたまま、望の腹部へと、アッパーを繰り出した。

「ゴボッ！」

望は、腹から戻る大量の血液を、口から吐き出し、そのままうなだれた。

その様子を見たバノドスは、望を放り投げると、「ちゃんと回復してから、来てって言ったでしょう」と付け加えた。

『何なの……アイツ。この前のキュルネピンなんて、比じゃないじゃない。これは、ピンチかもね』

再度立ち上がり、回復を行った望は、「じゃあ、ちょっと待っててくれるかしら」と言うと、気合いを入れ直した。

黄金色に輝く白衣は、胴着へと変化し、拳は、黄金のオーラが立ち上るナックルクローへと変化していた。

「姿が変わると、強さが変わるの？ そんな余興はどうでもいいから、本気で来なさいよ!!」

「余興かどうかは、あなたの目で確かめたらいいのよ!!」

言葉と同時に、望が仕掛けたと思ったが、バノドスの視界から望が消えた。辺りを警戒していたバノドスだったが、足に痛みを感じ、下段蹴りを打ちながら360度回転したが、手応えはない。続けて、頭部・腕・腹部と連撃で痛みを感じた。

「やるじゃない。キュルネピンを殺ったってのは、そのスピードがあるからなのね!? でも、キュルネピンに比べたら、まだまだ遅いわよ!」

バノドスには全く見えていなかったが、そう叫ぶと、精神を集中し目を閉じて、無防備な状態で構えた。

『心眼!? その場しのぎで、あつて欲しいものよね!!』

と、ランダムに動きながら、右足首へと蹴りを繰り出した瞬間、望の足はバノドスに踏み付けられていた。

「あなた、心眼も知らないの?」

足を踏まれて、身動きのとれない望を見下ろすようにして、バノドスは呆れたように言うと、望の足を踏み付けたまま、連打撃を繰り出した。

「ちよつと、ちよつと待って! いやあああ!!」

望の叫びも虚しく、砂埃を上げながら、バノドスは望の身体の感覚が無くなるまで打撃を繰り出し続けた。

「ハア! ハア! ハア! あ、跡形もなく、消し飛んだか!？」

と、バノドスが砂埃の中を確認すると、「いやあああ! なくんでね」と、舌を出して照れ笑いする望がサッと飛び去った。

「バ、バカな……。確かに手応えは、あつたはず……」

驚愕の眼差しで望を見詰めるバノドスであったが、「あれ? もう女の話し方はオシマイかしら?」と言われ、「何を!」と逆上

した。

しかもその直後、「もうあなたの勝ち目は無くなっちゃった」と言われ、バノドスは怒りを目に溜め、望に突撃した。

この時、黄金の拳と胴着を身につけた望は、微動だにせず、バノドスの攻撃を待っていた。

バノドスの繰り出した右正拳突きを上方へ流すと、次にくる左アッパーを自分の左へ流し、がら空きの腹部へ膝蹴りを繰り出す。

バノドスが離れ、上段から下段の蹴りを繰り出せば、下段蹴りにて迎え撃ち、軸となる足に、渾身の一撃を放った。

「柔よく剛を制すって言葉、知ってる？ まあ、知ってたところで、何も変わらないんだけどね」

「物界古来の武道の教訓か……。だが、そんなくだらん受け流し術ごときで、このバノドスが倒せると思っているのか!!」

望の言葉を聞いて尚、全身に力をこめたバノドスは、「あゝあゝ、あゝあゝ」と叫びながら、どす黒い紫色のオーラを出し始めた。オーラに包み込まれたバノドスは、拳連打を繰り出し、飛び掛かった。

「くだらないかどうかは、その身体で感じてみれば、いいんじゃない!!? 柔よく剛を制すの神髄! その一、心!!」

バノドスの攻撃を紙一重で避けながら、一步も後退する事なく、望はその場を維持し続ける。

そのまま避けるだけでなく、拳撃と拳撃の僅かな隙に、一撃、また一撃とヒットさせていく。

「剛拳に屈する事なく、確実な攻撃を行う事の出来る技術! 柔よく剛を制すの神髄! その二、技!!」

スピードを上げたバノドスの攻撃がヒットし始めたが、望はその攻撃を瞬間の後退にて、最小限のダメージへと変換していく。

「剛拳すなわち、強き拳の拳。強きは、柔軟なる手合いにて、身体へのダメージを差し押さえる! 柔よく剛を制すの神髄! その三、体!!」

「訳のわからん事を、いつまでもごちゃごちゃぬかすなあ!!」

バノドスが放った渾身の正拳突きを、右手で受け止めると、その反動を利用して身体を回転させ、望はバノドスに裏拳を繰り出した。「柔よく剛を制す! その神髄とは、心・技・体の組み合わせから発動する最強の武道! それが、武術よ!!」

望の言葉を聞いたバノドスが、「それがどうしたあ!!」と、連打撃を繰り出すと、望は踊るようにして、徐々に地面より浮かび始めた。

しかし、苦痛の表情を浮かべているのはバノドス。望は、バノドスの攻撃から出る威力を利用し、反動裏拳を繰り出し続けていたのだ。

「認めん! 認めんぞお! こんな敗北があるものかあ!!」

攻撃を緩めたバノドスは、すでに顔が原形を留めていなかった。

そこへ望が駆け寄ると、バノドスを押し倒し、マウントポジションをとると、顔が砕け散るまで、殴り続けた。

「だから、後悔しても、知らないわよって、言ったじゃない」

望はそう言って、首の無くなったバノドスより離れると、家へ帰っていった。

「おいおい。こんな物、置いていったらダメじゃんよ。まあ、今日の後始末は、俺がしておいてやるよ!」

そう言って神治は、民家の屋根から飛び降りると、首の無くなったバノドスの身体を剣で持ち上げると、「ハアッ!!」と気合いを入れ、形を残さぬ肉片へと細切れにした。

『しかし、望の奴、相変わらず手え抜いてやがんな。氣い引き締めねえと、マジで死ぬってのが、わかってねえのかよつと。まあ、今日のところは大目にみてやるよ、勝ったしな。さあて、俺も帰るか! じゃあな、望。また明日!!』

望の家の方を見ると、神治は民家の屋根に飛び乗り、瞬く間に、暗闇へと姿を消したのだった。

レンゲル

「おい！ 春騎、望。ちよつと、話がある」

神治がそんな話を持ち掛けたのは、バノドスを倒した次の日の放課後の事だった。

「どうした、神治……。恐い顔してよお……」

「流君……。何かあった？」

二人の顔を見ると、不機嫌そうにしていた神治は、突然机を蹴り飛ばした。

「お前ら！ この前、言ったやろうが！ 相手ナメとったらマジで死ぬってな！！ キュルネピンが雑魚なだけで、他の奴らは強いってよ！！ 春騎い！！」

突然、指差され呼ばれた春騎は、思わず「はいっ！！」と返事をして、立ち上がった。

「お前は、まだ半覚醒か！？ この前のヤービダヌの時、ヤバかったの覚えてるよなあ！？ 早く完全に覚醒しろ！ 春騎の肉を乗っ取ってしまえ！！ わかってんのか、ルシベス！」

神治は、怒鳴るように春騎に言うと、春騎の返事を待った。

「俺……。ルシベスじゃねえのかよ……。まだ、完全にルシベスじゃねえのかよ！？」

「まだって、それにも気付かねえのかよ！！ まだだ。まだ、春騎が残ってる。春騎として生きていくのは構わねえ。でもよ、春騎という人格は、喰い潰してしまえ。わかったな、ルシベス」

「わかり……。ました。アルモレヌス様……」

うなだれた春騎は、ボソツと呟いただけだった。

「そして、望！！ 昨日のバノドスとの戦い、見せてもらったけどよ！ 初めから、全力で戦えよな！！ しかも、最後の最後までカッコ付けとったけど、全力じゃあねえだろ！ 相手がバノドスで良かったものの、もっと半端ない奴が来たら、確実に殺されっぞ！！」

神治の言葉を聞いた望は、逆に神治に掴み掛かった。

「見てたのなら、どうして助けてくれなかったの！？　どうして、ずっと見てただけなのよ！？」

「甘えんなよサレネ。お前の本気なら、バノドスなど、初めから敵じゃあ無かっただろうがよ！！　それをチンタラ、戦いを引き延ばすような事をやりやがって！　しかも、死骸を残して帰るたあ、どういう事だよ！　ここは、物界の世界なんだぞ！！」

「ご、ごめん。それは、完全に忘れてた……」

「忘れてた……じゃねえよ！　あれじゃ、ただの変死体じゃねえか！？　俺が見てたから、片付けておいたんだぞ！　助けてじゃねえだろがよ！！」

初め勢いの良かった望も、神治の気迫に押され、落ち込むようにして、黙り込んでしまった。

「でもよ！　じゃあ神治は、初めから速攻かけれんのかよ！？」

突然立ち上がり、神治の胸倉を掴んだ春騎だったが、「見本が来てる」と神治に静かに言われ、手を離された。

「よし！　行くか！！」

突然立ち上がると、教室を出ていく神治を二人は無言で追い掛けた。

「なあ、どこまで行くんだよ……」

「こっちに何かあるの？」

ただついて来るだけの二人は、不安の表情を隠せずにいた。

暫く歩き続け、辺り一面木で囲まれた場所に来ると、神治は足を止めた。

「おい！　いつまで、ついて来るつもりなんだよ！！」

神治が大声を出すと、春騎と望の二人はビクツと身体を震わせ、互いの顔を見つめ合った。

「流石はアルモレヌス。気付いていましたか。して、このような場所へ来て、どうするつもりです？」

空から聞こえる声に、春騎と望は上をキョロキョロと見渡した。

「相手してやつから、かかってきやがれ！！ レンゲル！」

神治は、別に上を見るでもなく叫ぶと、武具を装備せずに構えに入った。

「それでは、お言葉に甘えて……死ねや！！ アルモレヌス！ 私達の世界を返しなさい！！」

突然、上方から人が降って来たと思うと、神治は左右の手に長刀を出し、剣撃から生じる衝撃波を飛ばした。

しかし、それを空中であるにも関わらずレンゲルは、ヒラリヒラリと軽く避けると、神治へと突進してくる。

「ちい！！」と舌打ちをしながら、神治が刀を振り下ろした瞬間、レンゲルは姿を消した。

「甘いぜレンゲル」

言葉を発した神治の後ろで、双刀を身体に突き刺されたレンゲルが、身動きをとれなくなっていた。

「アルモレヌス。どうして私を刺せたのだ……」

「はっ！ 笑わしてくれんじゃねえか。お前は元々、相手の攻撃を読みだけで回避するんじゃないか？ しかもだ、俺に刺されんのは、初めてじゃねえよなあ！！」

話をしているうちに、表情が邪悪に変化していった神治は、刀の突き刺さったレンゲルを持ち上げると、まるで豆腐を切るかのよう

に、斬り刻んでいった。

「アハハハハハ！ 一滴の血も残さず、消し飛んでしまええ！！」

急速の剣撃により生じた剣熱により、肉から流れ出る血も、少しずつ蒸発していった。

「悪魔だ……」

思わず漏らした春騎の一言に神治は、鋭い視線をぶつけた。

「わああああ！ ごめん！ ごめん！！」

両膝をつき、両手を合わせる春騎の肩をポンと叩いて、「悪魔……か、当たりかも……しんねえな」と神治は呟いた。

「ちょっと待って！　ねえ、今のレンゲルって奴が言ってた「私達の世界を返せ」って何のこと！？　それに、どうしてあなたは、七闘鬼の事をそんなに知ってるのよ！　さっきのレンゲルだって、初めて会ったって感じじゃなかったし……」

悪魔を肯定した神治に疑惑の募った望は、恐る恐る質問してみた。

「ま、いつか知る事だ。話してやるよ。けどよ、聞いたら自分に責任持てよ！！」

神治は、深く息を吸い込むと、ゆっくり吐き出したのち、話を始めた。

「前に、邪闇界の奴らが、超常界や物界に戦乱を起こしたって話はしたよな。それは、当然の事なんだ……。この世界は、元々邪闇種が住んでいた。それを初めに侵略したのは、俺達、超常種なんだよ。型物ってのは、その時に産み落とされた超常種の成り損ない。物界の奴らの言う天使や神って存在は、元々、超常種ではなく、邪闇種なんだよ。そもそも、この超常種・邪闇種って呼び方も本当じゃない。ラズリセルが、この世界を侵略し、奴らをたたき出した時に、付けた呼び名だからな。その時俺もそこにいた。すまねえな春騎、嘘ついててよ。俺は犬じゃねえ。生粋の超常種だ。その侵略戦争の時、俺はラズリセルの側にいた。そして戦ったのさ、七闘鬼達と。だから、奴らは全員知っている。話を元に戻すと、この世界の害虫は、邪闇種じゃなく、型物や、俺達超常種なんだよ。俺達超常種は、侵略種族……。そう、さっき春騎が言った悪魔ってのは、あながち嘘じゃねえって事だ」

「ちょっと待って！　じゃあ私達は、故郷を取り返そうとしている奴らを殺しているって言うこと！？」

望がヒステリックな声をあげて、話を中断させたが、神治は黙ったまま頷いた。

「じゃあ、俺達のやってる事って一体……」

春騎も悔しそうに、地面を見詰めながら呟いたが、神治は何も答えなかった。

そして神治は、空に刀を向けると大きな声で叫んだ。

「邪闇界邪闇主ダロン！ 聞いているだろう！ デルスは、お前らにこの世界を返すつもりなど、毛頭ないだろう！ お前らが、俺の持つラズリセルの魂を奪った途端、【楔】の力を解放し、不純な輪廻へと戻し、お前らを再び封印するだろう！ まずは、デルスを倒せ！ その後、俺達が相手になってやる！！」

声は空虚に消えたようにも感じたが、「第二段階終了」と神治は、その場に座り込んだ。

「神治……。俺達は……」

不安気な表情のまま落ち込む二人に対して、「俺を……信じてくれ」と、神治は肩を軽く叩く他、出来なかった。

ギュビヤム

（忌ま忌ましいアルモレヌスめ！ このままでは、ダロンの兵がここへ攻めて来るのも、時間の問題か……。近衛兵！！ 守りを固めるのだ！ 早急に！！）

ダロンの兵は残った七闘鬼三体で構成された小数で、超常界へ攻め入った。超常界の兵も、それなりには応戦したが、力の差は歴然で、近衛兵達は成す術もなく打ち倒され、デルスのみを残す状態となった。

そしてデルスは、瞬殺にて討ち取られたという。

（おい！ 聞こえるか！？ ナルル）

（久しぶりじゃねえか。聞こえてるぜ、アルモレヌス）

（今回の戦いには？）

（もちろん、参戦してねえ）

（よし！ じゃあ、暫くの間、お前が超常主をしていてくれ！ 頼

んだぜ！）

（了！解！！）

『すまねえな……。ナルル』

「神治……。この戦い……。意味、あるのか？」

下校時、校門前で春騎は、疑いを隠せない表情で、神治に話し掛けた。

「春騎。あと三体だ。あと三体倒したら、終わりにする。だから、俺を信じてくれ」

神治は春騎を直視したまま、そう呟いた。

「あと三体で終わるのか？ ダロンはいいのかよ！ あと三体って、七闘鬼の事だろ！？ アイツら、自分達の故郷を返して欲しいだけ

じゃねえのかよ!？」

春騎は神治に掴み掛かったが、側にいた望に、引き離された。

「道程君。あと三体だけ……。頑張りましょう。流君を信じて、ね」
望の一言で、春騎はうなだれるしかなかった。

「あと三体ですか……。その三体の中に、俺も入っているんだろうね。ん？ アルモレヌス？」

突然聞こえた声に、三人が顔を上げると、スーツ姿のサラリーマン風の男が立っていた。

「ギュビヤム……。今度はお前かよ!」

「俺の相手は、誰がしてくれるのですか？ あのデルスとかいう、手応えのない奴みたいなのは、嫌ですがね」

そう言って、ギュビヤムは声を殺して笑っている。

「俺だ! 俺がお前の相手をしてやる!! 一瞬で終わらせてやるから、覚悟しとけよ!!」

春騎が、二人を押し退けて前に出た。

「成る程。ルシベスですか。あなたとは初対面ですからね。自己紹介をしておきましょう。私だけ、あなたの事を知っているのは、フェアではありませんからね。……。私の名はギュビヤム。邪閻界七闘鬼のうち、三武神が一人、怒号のギュビヤムです。私の身体は、ヤービダヌより硬く、バノドスよりパワーがあります。それでは、始めましょうか？ アルモレヌス側近兵ルシベス。爆炎の戦斧ルシベスさん」

そう言って、ギュビヤムは軽く会釈をした。

「お前え! 俺の事、ナメてんじゃねえぞおお!! 速攻だ!! 速攻、マジで行くぜええええええ!! 敵に塩を贈ったこと、後悔しやがれ!!」

春騎が走り出すと、ドオンと爆発音がしたと思うと、春騎は無数の棘の突き出た深紅の鎧に身を包み、ギュビヤムへと走り込んでいった。

「何が爆炎の戦斧だ!! いくぜえ! 粉碎奥義、ダブルメガトン

ハンマー!!」

声と同時に、両手に巨大なハンマーを取り出すと、ギュビヤムを挟み込むようにして、打ち付けた。

「これじゃ、足りねえってんだろ！ 追加奥義、クラッシュアーツクス!!」

そしてそのままギュビヤムを空中へ放り投げると、両手のハンマーを巨大な戦斧へとチェンジし、戦斧の刃をクロスするようにして、斬り付けた。

「どうだ！ キザ野郎！」

両手に持った戦斧を、ブウンと振り回すと、左の戦斧を肩に担ぎ、右の戦斧でギュビヤムのいる辺りを指した。

「悲しいですねえ。俺は、そんなくだらない技を、見に来たのではないのがねえ」

砂埃の中から現れたギュビヤムは、無傷の状態で、服に付いた砂を払うと、バトルフォームへとチェンジした。

「ヤベエ!! 春騎！」

神治が咄嗟に飛び出した時、すでに遅く、春騎の身体はギュビヤムの腕にて貫かれ、春騎の背中より出た手が春騎の頭を掴むと、まるでトマトか何かのように握り潰した。

「悲しいですねえ。ルシベスは、ルシベスではなかった……と。型物が残っていましたか……」

潰れた春騎から手を離すと、崩れ落ちた春騎を踏み潰し、神治達の方へと近付いてきた。

「春騎を……。春騎を殺りやがったなあ!! ギュビヤム！ お前えええ!!」

怒りに満ちた目で、睨む神治を涼しげな表情で、「あなた達と、特には変わりませんよ」とギュビヤムは、サラっと言うと、神治に對し、手招きした。

「殺す！ 殺してやる!! ギュビヤム！ 俺の強さを忘れたとは、言わせねえぞおおおお!!」

「アルモレヌス。あなたのデータは、先の戦いにおいて、すでに収拾済みです。俺が、あなたに負ける通りはありません」

「その戦いで、俺に殺されかけたのを、忘れたのか!!」

「それも、過去の話。どうぞ、かかって来てください。返り討ちにしてくださいよ!!」

そう言って、再度手招きしたギュビヤムに対し、バトルフォームをとった神治は、暫く相手を睨み続けた。

「じゃあ死んどきやがれ!!」

そう叫んだ神治だったが、ピクリとも動かない。

「どうしたアルモレヌス! 俺が恐くて動けないのか!!」

「もう終わった。ギュビヤム、お前の負けだ」

「何を言っている! 来ないのならば、俺からいくぞ!!」

余裕の笑みを浮かべたギュビヤムが、攻撃姿勢に入ろうとした瞬間だった。ギュビヤムの身体に、十字の線が入ったと思うと、ギュビヤムは「え? あれ?」と情けない声と共に崩れ落ちた。

「斬られたことすら、気が付かねえなんて、弱え証拠じゃねえか!」

そう叫ぶと、装備武具を解除すると、望の所へと歩み寄った。

『速い!! わ、私にも見えなかった……。物界の肉を身に付けてもこのスピード……。アルモレヌス、お前はどこまで強くなっているのだ……。』

望の身体にいる事も忘れ、サレネは、驚愕の思いで、神治を眺めていた。

「望……。次はお前かもしれないねえ。死ぬんじゃないぞ……」

そう言って、神治は寂しそうに、肩を落として帰っていった。

デルネググ・ウリヤム

休日の昼下がり、望は神治の家を訪ねていた。

「神治に女の子が会いに来るなんて、雨でも降るのかしら」

「母さん、もういいよ……。で、望どうしたんだよ」

神治は、母親を振り切ると、望を部屋へと案内した。

口を閉ざしていた望だったが、神治の部屋に入ると、辺りの様子を気にしながら話を始めた。

「ごめんね。いきなり来られても、困るよね。でも、大事なことだと思ったから、きちんと聞いておかなきゃって思ってた……。あのね、流君が言っていた七闘鬼も、残るのもあと、三武神の二体のみよね。そして、流君はあと二体を知っている。という事は、どちらがどちらに当たっても大丈夫なように、私にその二体のこと教えてよ」

「そういう事か……。そりゃあ、確かにそうだな。わかった教える。でも、最終戦が終わったら……。いや、なんでもねえ。じゃ、教えるぞ。まずはデルネググ。スピードと心眼の覇者だ。キュルネピンと互角のスピードを持ち、レンゲルと同じく、瞬時に相手の動きを読む。レンゲルのように、読みだけだったら、大した事はねえんだけど、そこにあのスピードが加わったら、マジ厄介だ。そして、出来ればお前には戦って欲しくねえのが、ウリヤム。七闘鬼三武神筆頭、一騎当千の実力の持ち主。スピード・パワー・防御・読み、その全てが、他の七闘鬼に匹敵し、ダロンが唯一信頼する存在だ。コイツに勝つ為には、命懸けでぶち当たることのみ。ただ、これだけだ」

真剣に説明をする神治だったが、その表情に全く笑みはなく、不安感で溢れていた。

「流君。どうしたの？ 何か心配事でもあるの？」

神治の顔色をみた望が、話し掛けた時だった。

「それは仕方のない事だ。アルモレヌスに心配はないだろうが、お

前には勝利の確率が全く無いのだからな」

神治達が振り返ると、家が無くなっており、神治達がいた部屋だけが宙に浮いていたのだった。

「母さん！」

思わず叫んだ神治だったが、そこに母親の姿がある筈もなかった。「それでは、邪魔な物も無くなったので、始めましょうか。アルモレヌス」

神治の前に現れた少年は、すでに構えた状態で話し掛ける。

「デルネググ！ お前の相手は望に任せる。俺はウリヤムを……」

「それは困りましたね。ウリヤムは、確実にサレネを殺すと言っていましたか？」

神治が望の方を振り返ると、そこに望の姿はなくなっていた。

「くそお！ お前なら望で何とかなるけど、ウリヤムはヤベェよ！
！」

「まあまあ、落ち着きましょうよ。どのみち、サレネも消さないといけない事ですし、あなたの苦労が一つ減ったと思えば……」

悔しがる神治を余所に、デルネググは淡々と話を進める。

「な、お前！ 今、何って言った！？」

「おや？ 違いましたか？ あなたが進める世界統合計画……。それは元々、ダロン様が提唱なされていたこと。まあ、そこに私達の殲滅は入っていませんでしたが……。ねえアルモレヌス、違いましたか？」

「もう、それ以上言うんじゃない！ わかった。お前を殺して、ウリヤムのトコへ行つてやるぜ！！」

神治の目に怒りが満ちた途端、デルネググに向かって斬り掛かっていた。

一方その頃、望はというと……。自分をワシと名乗る少年と対峙していた。

「あなたはデルネググなの？ ウリヤムなの？」

「ククク。元超常種にもかかわらず、見た目でしか判断が出来ないとは、悲しいな。のうサレネ。ワシか？　ワシはデルネググ。ちっとは、安心したか？　ククククク」

「ウリヤムじゃないのね！？　デルネググなのね！？　じゃあ、勝機は十分！　行くわよ！！」

そう言って、憂すら笑いを浮かべるウリヤムに飛び掛かった。

最初から全力で。と指示を受けていた望は、黄金の胴着に赤金色の拳に身を包み、ウリヤムの懐に入り込むと、連打撃を繰り出した。「ククククク。アルモレヌスから聞いてなかったか？　ワシは行動が読めるのだよ。お前が飛び出した時から、その動きは手にとるように把握している。しかも、その非力な攻撃で、ワシを殺せると思っているのか？　ククク、ククククク。楽しいなあ。のうサレネ。クククククク」

腹部に連撃を受けながら笑い続けるウリヤム。その状況に望は、焦りを感じていた。

『スピードと、読みだけのデルネググにすらダメージを与えられないの？　私ってそんなに非力なの？　どうしてなのよ！！』

スピードとパワーを限界まで上昇させ、連撃を継続する望。しかし、デルネググと偽ったウリヤムは、微笑すら浮かべサレネの体力が尽きるのを、攻撃を受けながら待っていた。

「く！　ちょこまかと、ウゼェんだよ！　さっさと俺に斬られやがれ！！」

デルネググの裏を突くように、不規則な斬撃を繰り出していた神治だったが、デルネググのスピードに翻弄され、攻撃を当てることも出来ずに苦戦していた。

「右、右、右、そして左！　ハハハハ！　簡単簡単ですね、アルモレヌス。それじゃあ、僕に触る事すらできませんよお！　ハハハハ！！　こっちですよ、こっち！　右、左、上、下、左！　っと、何かゲームでもしているみたいですねえ。ハハハハ！」

「くそお！ 早過ぎんだよ！ ちよろちよると、目の前を動きやがって！！ チィ！！ またハズレかよ！ あゝ鬱陶しい！！」

キヨロキヨロと、辺りを見渡しながら、刀を振っていた神治だったが、自分へのダメージもなく、攻撃もヒットしない為、「もう止めだ止め、お前はウリヤムの後に相手してやるよ！！」と、言い放つと、デルネググに背を向け走り出した。

「ちょ、ちょっと待ってください。あなたの相手は今、僕なのです。だから、ちょっと……ど、待……っで……」

神治を追い掛け、その進行方向に回り込んだデルネググだったが、違和感を感じる神治の表情を見て、引き返そうとしたが、すでに遅く、腹部と左肩に深々と刀を差し込まれていた。

「お前の読みは、ここまでは無理だったようだなあ！ これで、遊びは終わりだ！！」

そう言って、突き刺さった刃を抜く訳でもなく、縦横無尽に斬り付けると、振り返りもせず、望の所へと急いだ。

「ハア！ ハア！ ハア！ あ、あなた、本当……に、デル、ネググ、なの！？」

「デルネググ？ ここまで戦っても、まだわからんとは、バカ正直ってヤツか？ クククク。そろそろ死のか？ なあサレネ……」

ウリヤムの策略に気が付いた望だったが、すでに次の行動に移る体力も残っておらず、ウリヤムの腕に包み込まれるようにして、立っているのが精一杯だった。

ウリヤムは望を突き飛ばすと、その両足首を掴んで、逆さに持ち上げた。

「クククク。そろそろかのう？ アルモレヌスは、まだ来んのかのう。早く来いアルモレヌス。ククク、ククククク」

望を逆さに持ったウリヤムを見付けた神治は、声も掛けず、刀を取り出すと、斬り掛かった。

しかし、背後からの攻撃にも関わらず、ウリヤムはその攻撃を避

けると、さも楽しそうに、神治の方へと振り向いた。

「やっと来たか。アルモレヌス。待ちくたびれたぞ。のう、サレネ。待ったよなあ？ クククク」

そう言っ、両手に持った二つに引き裂かれた望に、頬擦りした。

「！！ ああ！ 望い！」

神治は手にした刀を肩に担ぐと、ウリヤムへ向かって突進した。

「お前で！ テメエで！ 貴様を殺ったら、最後だあ！！ 死にやがれ！」

闇雲に刀を振り回す神治を、ウリヤムは楽しそうに眺めていたが、その動きを突然止めると、刀をその身に食い込ませた。

「な……に……！！！」

「アルモレヌス。長かったよのう。ワシも、もう疲れたわ。これで、ダロン様の願いが叶うのよ……のう？」

刀が突き刺さったままのウリヤムは、神治の肩を掴むと、その胸に爪を立てた掌を突き立て、胸を貫いた。

「ハハハ。そうだな。これで、ラズリセルの願いが叶うな。なんだか、気が合いそう……じゃねえか……」

お互いに腹や背中から、臓物を垂れ流した両者は、そのままその場に崩れ落ちた。

『ラズリセル。終わったぜ！ これで……これで、いいんだな……』

「ダロン様……。任務……。完了……。しま、した」

次の日、世界は何事もなかったかのように、継続し続いていた。

神治も、望も、その家族すら失った世界。

しかし、彼等が初めから無かったモノのように、世界の時間は止まることはなかった。

偽りのない世界

この世に放たれた輪廻という循環は、魂の寄り処を、地でも天でもなく、生物という、いずれ腐敗するナマモノに委ねている。

魂は、肉体が死滅し、腐敗すると同時に、他の肉体に寄生し、また、新たな進化の過程を築いていく。

世界に散らばる超常種と呼ばれた幻想生命体、そして物界種の魂。それらは混じり合い、物界にて型物として、命を繰り返す。

精神世界に存在する幻想生命体。過去、邪闇種と呼ばれた、混じり合う事のない種族……。それは、神や仏と名を変えていた。

「争いを好むのは、超常種としての宿命。物界には争いが絶えない。弱肉強食が絶対理論で、他者・他種族を駆逐し蹂躪する。それは仕方のない事。そのような貴様達に、相応しい呼び名を与えよう。人の形を持ちて、我々幻想種との間に存在する種族。人との間。そう、もう型物ではない。その侵略種族を人間と呼ぶ事にしようではないか。これが、【輪廻の楔】など必要のない、本当の寄生転生です。そうですよね……ラズリセル……」

ダロンは静かにそう言うと、悲しげな表情で、眼下に広がる広大な大地を眺めていた。

緑や青が減少していく、その呪われた大地を……。

『ラズリセル……。本当に、これで良かったのか……。？ お前がここに来た時の約束……。守ったぞ。……。そしてアルモレヌス、お前はこれで良かったのか？ 結局お前も、ラズリセルに……。』

※―――

世界を区分すると、二つに分ける事が出来る。

俗世と呼ばれる、云わばこの世。

常世と呼ばれる、云わばあの世。

俗世を噛み砕いて云うと、俗物の世界となる。更に云うと、低俗な物の住む世界という事になる。

常世を噛み砕いて云うと、常に在る世界となる。

そしてこの二つの世界について、矛盾を感じないだろうか。

現世を俗世と呼称するのに対し、死後世界を常世と呼称する。

しかし、我々生者の目からすれば、常に存在する世界は現世であり、低俗な物の住む世界は、鬼の住む地獄であるように推察される。では、何故この二つの世界に矛盾があるのだろうか。

それは、人間の心の中に存在する。

この世に存在する生命体は、皆罪深い生き物で、弱肉強食という自然摂理の上に成り立っている。

強者は弱者を支配し、蹂躪する。強者が弱者を捕食する。強者が弱者を蹴落とし、のし上がる。

本能的に行われるこの行為。そして人間は、他種族に比べ、その傾向が強い。

その結果から生み出した二つの世界。矛盾があるのは当たり前。

何故なら、この二つの世界は、どちらも現世なのだから。

強者が弱者の上に君臨する、弱肉強食という概念。

それでも、強者は脅えていた。自分自身を脅かす、死という脅威に。

だからこそ、死を克服する為に、現世とは異なる世界を創造した。しかしながら、結局、摂理には逆らえない。

結果、自分達を卑下する表現世界の創造になったのであり、それこそが真理であつたのである。

すなわち、俗世Ⅱこの世は、常世Ⅱあの世と同等であり、俗世Ⅱあの世で、常世Ⅱこの世と考えられるのだ。

俗世Ⅱこの世（あの世）Ⅱ常世。

生物は地獄で生き、死ぬと地獄で溜めた罪（業）を持って、地獄へ転生する。

これこそ世界の命・魂が、不純物と混じり合う事のない、無限^ル転生である^プと考える。

しかしその真意は、死して知るしか方法がないのも、また事実である事は否めない……。

偽りのない世界（後書き）

久しぶりに書くと、不明文章になってしまいました。

短かったです、読んで下さりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6770u/>

【真の循環】

2011年8月28日03時27分発行